

# 賢者の力の使い道

湯たぽん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

私には特別な力がある。

でも、私に力を授けてくれた人達は・・・

目次

三話	二話	一話
12	6	1

## 一話

私が靴を履かなくなったのは、いつごろからなのだろう。

不意に目が覚め、次第に居心地が悪くなってくる布団の中で、私は考えていた。

おそらく、産まれた時から、17歳になった現在に至るまで、履こうとした事はあつても履いて歩きまわった事はないだろう。

私には、特殊な体質が備わっているからだ。

産まれて数カ月後には既にこの体質が発現していたと聞いている。人が立ち上がるのは、1歳前後。少なくとも、この特殊体質が身に付く前に

靴が必要になる事はなかったであろう。

「・・・仕方がない。私は生まれが普通じゃないもの」

諦めと共につぶやいて、私は布団の中を覗いた。

・・・ああ、やっぱり。

布団の中は、蔦で埋め尽くされていた。

私が意識して物に触れると、精密機械などよほどの無機物でない限り、

そこからは植物があふれ出てきた。

足の方はもつとひどく、私が歩くと足元から次から次へと蔦や花が咲き乱れてくる。

足が地面につくよりも早く、きれいな植物が生えてきて

受け止めてしまうので、靴が必要ないのだ。

履いた瞬間に靴の中が植物だらけになってしまうので履く事が不可能ですらある。

なので、昨夜のように雨が降ったりしない限り、私は外の木に  
自前のハンモックを吊るし、そこで寝るようにしている。

足を外へ投げ出す事になるので、無防備な上に行儀悪い事この上な  
いが。

さて、起きてしまったのでさっさと布団から出る事にしよう。

布団を破りかねないほどに成長した蔦を出来るだけ手で払い、私は  
部屋を出た。

布団だけでなく、廊下に出ても私の足からは植物が生まれてくる。

雨上がりは特に植物は元気だ。綺麗な花もどんどん咲いてしまう。

私がここに滞在する限り中途半端に掃除したところであつという  
間に

植物であふれてしまうので仕方のない事だが、それでも気にはな  
る。

「おや、起きたね、スズナ」

部屋を出た途端、階段を小柄な女性が上がってきた。

昔は相当な美人であつただろうことがうかがえる、気の強そうな顔  
立ち。

綺麗な白髪を頭の上でお団子にし、煙草をくわえながらこちらを見  
上げているのは

この家の主、ウエンディおばさんだ。宿屋でもないのに私を特に気  
に入ってくれて

毎度泊めてくれている。

「あ……おはようございます、おばさん。

その……」

私がつもっていると、ウエンディおばさんは煙草を

階段の下へポイと捨てると、豪快に笑った。

「あつはつは！布団の事気にしてるのかい？スズナ。

良いんだよ良いんだよ。あたしなんてこうやって煙草ポイポイ捨  
てちまうんだから。

掃除すんな自分なのね。火事にならなきやいいけど。あつはつ

は！」

何が面白いのか、常に爆笑しているウエンディおばさんにつられて私もつい笑ってしまう。

人と話すのは苦手だけれど、この人は嫌いじゃない。

私にとつては珍しい、”普通に”接する事の出来る人だ。

「朝ご飯は・・・何ですか？」

「おや、お腹すいてんのかい？珍しいね。あはは！」

いつも自分から話しかける事のない私。

ちよつと驚いたような、しかし嬉しそうな顔をして、おばさんはまた笑った。

「今日は晴れてて良い気分だね。外で食べようか！」

「はい」

私もまたつられて、につこり笑いながらテラスへ食器を出しに、台所へ向かった。

庭には、リンゴの木が何本も植わっていた。

代々医者をやっているという、ウエンディおばさんのロックベル家にも

当然のように生えているほど、ここリゼンブルの町は果樹栽培が盛んだ。

昔は羊毛、羊肉がメインだったが、今ではリゼンブルのアップルパイといえは

外国からの観光客も食べにくるほど有名だ。

とはいえ、さすがにお医者さんのウエンディおばさんが

リンゴの木の手入れにばかり時間をかけているわけではない。

垣根代わりに、道に面した場所にずらりと並んではいるが、

特に剪定や受粉など、手をかけているわけではなさそうだ。

私の手には、触れた植物をより早く成長させる力もある。

こちらの能力は人には知られていないので、私はこっそり、

ウエンディおばさんが世話しているリンゴの樹にだけ

力を分けてあげていた。今日も見られないうちに触っておこう。

朝食は、自家製のリンゴジャムをたっぷり乗せたホットケーキだった。

食べながらも豪快に笑うおばさんと一緒に楽しく食事をした後、私はいつものように散歩に出かけた。仕事まではまだかなり時間がある。

雨上がりの、ひんやりとした道を歩く。

ふわあああ・・・

不思議な音をたてて、私の足を元気のいい花が受け止めてくれる。リゼンブールという町は本当に土壌が豊かだ。

たった今、私の力をうけて生えてきた植物が、一瞬で私の膝近くまで

伸びてきて、いくつかは花まで咲かせる。

どう考えても通行の邪魔なのだが、ウエンディおばさん曰く

「羊のいいおやつになっているようだよ。むしろどんどん歩きまわって

もらいたいもんだって羊飼いのジャンも笑ってる。

あんたが気を遣うこたあないさね」

という事で、遠慮なくリンゴの木がそこかしこに並ぶ散歩道を

右へ曲がり左へ曲がり、無目的に私はのんびり歩いた。

飾り気のない、白いゆったりとしたワンピースに大きなひさしの麦わら帽子。

なんともベタな姿だが、イメージが大切な仕事だ。

仕事でも普段でも、私はそう変わらない格好をしている。何より白は私の好きな色だ。

「おう、スズー・ひつきさしぶりやのー」

「あ、スズナちゃん。今年もそんな季節なのねー。今年もお願いね！」  
町の人達が、私を見て声をかけてくれる。

“私の足元”を見て、ではないところがなんとも嬉しい。

リゼンブールは、巡業で年に一度しか来られない土地だが、私の一番のお気に入りだ。

宿もホテルではなく、優しく楽しいウエンディおばさんの家に泊れる。

この人たちのために、良い仕事をしなくては。

そう自然と頭に浮かんできたのか、いつの間にか私は仕事場に足を向けていた。



## 二話

そこは、大きな野外ステージ用のテントだった。前日夜のうちに用意しておいたのだが、雨が降ってしまったのでまわりで点検している人がたくさんいる。

「お、スズナ。今日はすいぶん早いじゃないか」

こつそり見に来るつもりだったのに、さつそく見つかってしまった。

「あ・・・いえ、昨日雨が降ったからテント大丈夫かな、って」

「がっはっは！大丈夫かなだって？大丈夫じゃなくても大丈夫にしてやるさ！」

雨だろうが台風だろうが、地震だろうがヘブンズキッチンの公演を邪魔することなんてできやしないのさ！」

今日はよく豪快な笑い声を聞く日だ。

この、私がお世話になっている劇団“ヘブンズキッチン”にはリゼンブールの街がよく似合う。

豪快な団長もこの土地が気に入っているようだ。

年々リゼンブールでの公演頻度が上がっている気がする。

「さて、じゃあスズナ。ちょいっと早い準備は整ったところだ。

リハーサルを始めるかい？」

私の仕事は、この劇団“ヘブンズキッチン”による演劇の主演。女神の役だ。

私自身演劇の経験があつたわけではなく、自分でもヘタだと思うのだが、

足元から花が生えてくるというこの体質は女神を表現するのに最適だ。

幼いころに両親を亡くし、親類に預けられていた私は、

一時も早く独立するためにスカウトしてくれたこの劇団にお世話

になる事にしたのだ。

「おお、スズナ！何故あなたは女神なんだ」

この劇団の練習はいろんな意味でハードだ。

人見知りで、あがり症の私には特別プログラム

「リハーサルは役名ではなく本名で、の刑」だ。

女神と人間の男性との許されぬ恋。ベタなお話ではあるが私が入団してから、

ヘブンズキッチンにおける大ヒット作だ。

これを本名でされると非常に恥ずかしい。

しかしお客さんの前でやるよりはよっほど気楽だ。

多少慣れてきた事もあり、私も本気で練習に打ち込んだ。

「お疲れー。さ、本番の準備に取り掛かるぞー」

リハーサルが無事終わり、テントの中の舞台には綺麗な白い砂が撒かれ始めた。

私の歩みに合わせて生えてくる花をより効果的に見せる工夫だ。

リハーサルで生えてきた植物を抜きながらなので、なかなかの重労働なのだが、

係の人は嬉々として抜いた花を束にしながら地面をならしている。

「スズナの花はお客さんに大人気なんだ。テント入口で配ると大喜びされるのさ」

というのが彼の笑顔の秘密。

私はというと、本番まで歩きまわれないのでこっそり客席を覗き見る事が出来る、

はしっこの楽屋で待機だ。

「・・・あっちに行きたいな」

椅子の上で小さく体操座りしていて、ふと自分の口から出た本音に  
驚き

私は誰かに聞かれてやしないかと周りを見まわした。

運よく誰にも聞かれてはいなかったが、私はうなだれるように自分の足元から

生えてきていた花に視線を落としたりした。

私は、この力が無ければここには居られない。

でも、生まれてからこの力から離れられずにいるのも……。

“歩く”事が普通に出来ない事は、やはり辛い。

そして“普通”に生きる事を許さない、そんな私の生まれを呪う事もできない。

生まれてこれただけで、私は奇跡なのだ。

「あく……スズナ？今ちよつと、さ……」

不意に、後ろから声をかけられた。本番までまだずいぶん時間があ  
るのに、何だろう？

振り返ってみると、困り顔の整理券売り場の係員さんと、

その後ろにお客さんが一人立っていた。

確かこの人は……。

「こんにちは、スズナさん。毎年公演を楽しませてもらっていますよ。

でも今年は、是非あなたの話をお聞きしたくて。

突然おじゃまさせていただきます。シノと申します。

錬金術を研究している者です」

とても丁寧なおじぎをするその人を、私は知っていた。

リゼンブルの街に住む錬金術師さんだ。

この国は、数十年前に大きな戦争と首都でのクーデターという、  
悲しい大きな事件を経験している。

その時代には偉大な錬金術師が何人も世に出たものだが、

国に平和が訪れると、何故か大きな力を持った錬金術師が少なくな  
り

今では錬金術を知らない人も中にはいるほどになってしまった。

シノさんも、錬金術師とは言っても本屋でアルバイトしながら細々と研究をやっている程度のはずだ。

「本当は追い返そうかと思っただけけど、団長がさ……。ごめん、スズナ」

係員さんが何故か悲しそうに言う。

「大丈夫、カシさん。」

もし錬金術師さんが面会に見えたら……。

会わせてくださいとお願ひしているのは私です」

「でも、そのたびにスズナ、悲しそうな顔するじゃないか……」

心配そうに、係員のカシさん。

「……いいんです。やらせてください」

「えーと……その……強引に頼み込んでおいて何だけど……」

錬金術師のシノさんも、このやりとりを聞いて申し訳なさそうな顔をしはじめた。

「いえ、大丈夫。多分シノさんの期待通りのお話ができると思いますよ」

シノさんを不安にさせないように、私はにっこりと笑い、足を椅子の下に伸ばした。

同時に足元から一本の植物が伸びてきて、瞬時に白い花を咲かせた。

「……それだよ。これほど間近で見るのは初めてだ」

シノさんが静かに感嘆の声をあげる。

「スズナさん……ズバリ聞きます。」

あなたの足元から花が生えてくるのは、錬金術の力ですね？」

「……そうです」

今までに何度かされた質問だが、やはり慣れない。私はうつむき加減に答えた。

「やはりか……。しかしそうなるよ」

あなたの業は、錬金術の法則に反している」

シノさんは先ほどの申し訳なさそうな顔から一変し、鋭い視線の真剣な顔になった。

「地面から植物が生えてきて成長し、花までつけるほどの錬成となる」と

特殊な錬金術を使用しているのか、

あなたの錬金術師としての力が私の計算を超えるほど

強大なものであるかのどちらかだ」

私の足元から生えてきた花をつつきながらシノさんは続ける。

錬金術にはエネルギー保存の法則、というのがある(らしい)。

基本的に錬金術はその場にあるモノを“変化させる”業だ。

何もない場所から“作り出す”ことは出来ず、

変化にもエネルギーなどの関係から限度はある。

私の足元から湧き出てくる植物は、たとえ地面に種などがあつたとしても

異常な成長変化だ、とシノさんは言っているのだ。

「シノさんは・・・賢者の石というものをご存じですか？」

がぼっ

シノさんは賢者の石、という言葉に反応して顔色を変えた。

私に頭突きしかねない勢いで近づいてくると、懐から分厚い本を取り出した。

「やはり、賢者の石・・・この研究書の記述の通りだ」

派手な赤を基調とした豪華な造りのその本には、

エドワード・エルリック著、と書いてあつた。

「強力な錬金エネルギーを宿した特殊な物質・・・それを所持すれば法則を無視して

大質量の錬成を行う事が出来る・・・まさか生物の発生、成長までできるとは」

シノさんは信じられないという顔をしながら、私の方へ手を伸ばした。

「もしかして、その青い石が・・・？」

胸元についたブローチを触ろうとする手をやんわりと払いのけて、  
私は両手を広げた。

「いいえ。賢者の石は……」

「私自身です」

### 三話

楽屋の外からは段々と人の気配が増え、賑わっているのを感じる。しかし、シノさんのまわりの空気は完全に固まっていた。

「貴女が・・・賢者の・・・石・・・？」

「はい。賢者の石の作り方について、その本にはなんと書いてありますか？」

私の質問に、シノさんはようやく我に返って本のページをめくり始めた。

「あ・・・！ええと、確か・・・」

「賢者の石は、複数の人の魂のエネルギーを凝縮したものである、と・・・」

シノさんの本をめくる指は震えている。それはそうだろう。

単なる好奇心のために訪れたサーカスで、このような重い話を聞く事になるなんて・・・思いもしなかったはずだ。

なんだか私も申し訳なく思えてきた。

しかし中途半端で話を終わらせるわけにはいかない。

「私の身体の中には、2人の魂が宿っています。」

私には錬金術は使えませんが、その2人の力によって、

私の足元から花が生えてくるのです」

シノさんは口をぽかんとあけて聞いている。

いや、これは聞いているのだろうか・・・？

「私の身体、賢者の石には私を作った2人の記憶が刻まれています」

私はそう言うと、シノさんの方へ手を伸ばした。

シノさんが首をかしげながらも手を取ると、私の身体から

私の体験していない記憶が流れ出てきた。

「これが唯一自分の意思で使える錬金術です。」

一緒に賢者の記憶をたどりましょう・・・」

視界が切り替わった先にあつたのは、両端を崖に挟まれた雨の中の情景だった。

記憶の中の景色なのに、酔ってしまいそうなほどに視界がブレにブレる。

馬車の中からの景色なのだ。

石だらけの悪路を、馬車が猛烈なスピードで走っていた。

「スズナさん、ここは・・・？」

シノさんの心の声が見つないだ手から伝わってくる。

「ラッシュユバレーだったようです。険しい山々に囲まれた街。そこへの旅の途中のできごとです」

記憶の中の馬車には、不安そうな顔の4人が乗っていた。

一人は泣きそうになりながら馬を駆りたてている御者。

乗客は3人だ。

お金のかかっていそうな身なりのいい白髪の紳士と、

お互い抱き合って何やら相談している金髪の夫婦。

「そのこの2人が、私の身体に宿っている賢者。私の両親です」

「やつぱり・・・」

シノさんと心の声で話していると、紳士の方が顔を上げ、

残る三人に声をかけはじめた。

「済みません・・・。おそらくあの盗賊共は私の財産が目当てでしょう。

関係のないあなたたちを巻き込んでしまった・・・」

紳士は帽子をとり、深々と頭を下げた。

夫婦は慌てて手を振ると

「とんでもない。一番の災難は狙われているあなたじゃあないですか」

紳士の言うとおり、完全に無関係なのに巻き込まれた立場でありながら、

夫婦は紳士の心配をしていた。

そんな夫婦の態度を見て、紳士は覚悟を決めたような表情で立ち上がった。

「私が降りましょう。そうすれば盗賊共はこの馬車を追いはしなはず」



ほろの向こうに居る御者にそう告げようと、  
紳士が暴れる馬車の中歩き出そうとしたその時――

ガシヤァン！

馬車は大きく横に傾ぎ、ほとんど一回転して止まった。  
馬が転倒したようだ。

「あ、うううう……」

「だ、大丈夫ですか……」

金髪の男性（私の父だ）の方が周りを気遣う。

御者が足をくじいてはいたが、荷物がほとんどなかったのが幸いしたのか

全員無事だった。

しかし……

「よっしやあ！チャンスだ野郎ども!!」

遠くから盗賊達の声が聞こえてきた。このままでは逃げられない。

「私が行けば皆は助けてもらえるでしょう。申し訳ないが御者君を頼みますよ」

紳士がふらふらと立ちあがろうとすると、今度は女性がその手をつかんだ。

「何を言うんですか。それじゃああなたが……」

心底心配そうに言う女性を見て、紳士はひきつった笑みを返した。

「大丈夫、今は何も持っていませんから。」

人質にでもなつて身代金を払ってもらったら無事に帰れるでしょう。

あなたたちも見逃してもらおうよう交渉してみます」

「立派な（）両親ですね……」

「……ええ」

シノさんが言う。

唯一私の両親を見る事ができるのがこの記憶なのだが  
偲ぶために見えるには私には辛すぎる映像だ。

「さあ、分かっているよな？全員動くな」

追い付いてきた盗賊に銃を突きつけられ、しかし紳士は毅然として  
立ちあがった。

「私がハボック財閥の会長だ。金が目的なら私一人で十分だろう。

あとの3人は見逃してやってくれ」

恐怖におびえていると予想していたのだろう、

盗賊の頭目はあてが外れて面白くなさそうに紳士をにらんだ。

「ああ、そうだとも会長さんよ。分かっただんなら話が早え」

頭目が顎をしゃくると、手下が手際よく紳士の手をロープで縛っ  
た。

「だが余計な事を話されると厄介なんぞな。連絡役は1人で、

2人は一緒に来てもらうぜ」

用意よく、脅迫状らしきものを懐から出すと、盗賊は御者にそれを  
押しつけた。

「ま、待ってくれ！」

すると金髪の男性がわめき始めた。

横には腹をかかえるようにして呻いている女性が。

「妻はお腹に子供がいるんだ・・・！今の転倒で腹を打つたらしい。

医者へ行かせてくれ！」

それを見て今度は両腕を縛られた紳士も盗賊に詰め寄る。

「私が居れば良いだろう！あの2人も街へ！入院していれば君たちに  
不都合な事をしていいる暇など無いだろう！」

詰め寄せられた盗賊の頭目は、ますます面白くなさそうに顔をゆがめ  
て、

紳士を押しつけた。

「う・・・っ！」

バランスを崩し水たまりに倒れ込む紳士。

それを見下ろしながら、盗賊は凶悪な笑みを浮かべていた。

「やっぱり分かっただねえな、会長さんよ。アンタ命の危機に晒されて

んだぜ？

「それも俺達に完全に握られてよ」

改めて銃を突きつけるが、大財閥の会長の肝は座っていたようだ。

「分かっている！金なら出すように連絡を取ろう！だが今は彼らを街

へ――」

「・・・その態度が分かかってねえって言ってんだよ！」

迫る紳士を再び突き飛ばすと、盗賊は銃を夫婦に向けた。

「これを見れば素直になるだろ！」

「・・・っ！」

たまらず、私は記憶の映像を打ち切った。

涙でぼやけた視界が戻ってくると、目の前に座ったシノさんも涙を流していた。

しばらく2人の、鼻をすする音だけが楽屋に響いた。

「・・・分かりました・・・。ご両親は、すぐれた錬金術師だったので  
すね・・・」

「・・・はい。撃たれた両親を放置し、

盗賊達はハボックのおじさまを連れ去りました。

まだ息のあった両親は最後の力で、お腹の中にいた私を錬成したの  
です」

命を使つての錬成。それが賢者の石を産んだのだ。

生まれたばかりの私を抱いて、連絡役選ばれた御者は雨の中街へ  
向かった。

後に、身代金を払い解放されたハボック財閥の会長は私を引き取っ  
て

育ててくれたのだった。

「・・・すぐれた錬金術師は最近、年々減っていつていると聞いていま

す」

私が言うと、シノさんは涙を拭きながら黙ってうなづいた。

「私は・・・それはこの国が平和になった証拠だと思っています」  
今度は理解出来なかったのだろう、シノさんは首をかしげた。

彼が何か言おうとする前に、再び私は口を開く。

「錬金術師というのは・・・悲しい出来事を背負って、  
力を得ていくものではないでしょうか」

ふと、何かに気付いたようにシノさんの身体がぴくりと動いた。  
さらに私は続ける。

「数十年前、この国で起きた戦争では、優れた錬金術師が何人も現れ、  
国を救ったと言います」

シノさんの顔に理解の色が見え始めた。彼はゆつくりと、  
だが力強くうなづき、言った。

「・・・悲しみを背負って、その力を振るったんでしょね・・・」  
今度は私がうなづく。

「では錬金術は、この世からなくなれば良いと・・・？」

錬金術師であるシノさんが、複雑そうに言う。

「・・・いえ。私は、錬金術のおかげでこの世に生まれてきたものです  
から

・・・でも・・・」

「こんな私のために力を使い切ってしまった両親の魂は、  
まだこの身体に宿っているのです。

・・・天国にも行けずに」

堪え切れずに、再び私の眼から涙があふれ出てきた。

「今見てもらった記憶と、育ての親のハボックおじさまの話でしか  
分からないけれどとても立派な両親だったんです。

その魂が私なんかのために・・・」

真つ赤になった眼をこすろうとした私の手を、シノさんは握った。  
左右に首を振ると、手に持った錬金書を指で示した。

「この本には、賢者の石についてこう書かれています。

“ 賢者の石は、単なるエネルギーの塊に過ぎない。

故に、いかに石の力が強大であろうがそ

れを扱う人間も相応の能力がなければ使いこなすことは出来ない

”

「・・・!?!」

私ははっと顔を上げた。今まで会った錬金術師さんも、私自身も。そんな事は考えた事が無かった。

「・・・それは、つまり・・・」

先を促す私に対して、シノさんは優しく足元の花を示した。

「この、貴女の能力は貴女自身のものだということです。

賢者の石は素晴らしいが、それだけではこの力はありません。

リゼンブルだけじゃない、国中の人を喜ばせて歩くこの足は、

賢者の力を有効に使っているということですよ」

私の手を握るシノさんの指に、力がこもった。

「貴女は素晴らしい。両親があれだけ立派な方だったんだ、当然の事です。」

自信を持つべきだ」

私で、良いんだ・・・!

私の眼からあふれる涙が勢いを増した。

だが今度は涙の意味が違う。

「こうも書いてあります。」

“ だが、石に封じられた魂は意思を持っている。彼らに報いるためにも、

石の力を正しい事に使い、早く解放してあげべきだ”

・・・ちよつと、研究書にはおかしな感傷じみた記述だと思いましたが

今理解しました。これは貴女達、賢者の石を持つ者へのメッセージだったのですね」

「はい・・・はい・・・分かります」

私は、言葉にならない声をあげながら何度も頷いた。

「私はこのままで良いんですね・・・。いずれは両親の魂は解放され、この力もなくなるんですね・・・」

シノさんも、何度も頷いていた。泣きじやくる私の両肩に手を置き「それに賢者の力が無かったとしても、自分達の娘の身体の中で共に居られるなんて親として最高の事だと思いますよ」ちよつぱり恥ずかしそうに、シノさんはしめくくった。

「ありがとうございます、シノさん。」

私はリゼンブールに来て、本当に・・・良かった」

私は泣きながら、シノさんに誓った。

いつか、両親の魂が私の身体から解放されて天国へ行き

私の足から植物が沸かなくなったら

改めてリゼンブールの大地を、自分の足で踏みしめよう。

賢者の力ではなく、自分の手でリングを育て、すべてに感謝しながら生き

そして両親の元へ帰ることが出来たなら、天国の台所で2人のために

アップルパイを焼こう。

2人が遺してくれた力の素晴らしさを語りながら。

誓いが終わると、私は涙を拭いて

崩れた化粧を直しにかかった。

誓いを果たすためにも、まずは今この舞台を完璧に作り上げなければ。

心配そうに見ているシノさんを尻目に、私は手を組み、祈りながら舞台のまん中へ歩き出した。

お父さん、お母さん。私をこの世に送り出してくれてありがとう。